全国学力・学習状況調査を授業改善に生かす　5

Ｈ２７．６．５

小学校　国語Ｂ

Ｂ問題

○　主として「活用」に関する問題（知識・技能等を**実生活の様々な場面に活用する力**や、様々な**課題解決のための構想を立て実践**し、**評価・改善する力**などに関わる内容など）が出題

○　「活用」の問題は，第５学年の終了段階において、習得すべき指導事項を小学校学習指導要領解説国語編に示す**言語活動例**などを遂行する中で活用できるかどうかをみる。そのため、「Ａ　話すこと・聞くこと」、「Ｂ　書くこと」、「Ｃ　読むこと」の各領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に示された**指導事項を複合**させて出題

Ｂ問題は、設問の意図が分かりにくく、どのような指導をすればよいか悩むな・・・。

学習指導要領解説の総説「１改訂の経緯」では、ＰＩＳＡ調査について触れています。さらに、Ｂ問題は、ＰＩＳＡ調査を意識して作られています。そこで、まず、ＰＩＳＡ型読解力について説明し、その上で活用する力を高めるためには、どのような指導が大切かについて解説していきます。

ＰＩＳＡとは、Programme for International Student Assessment の略
ＯＥＣＤ（経済開発協力機構）が実施している**生徒の学習到達度調査**

内　容

○　２０１２年の調査では、数学的リテラシー、読解力（読解リテラシー）、科学的リテラシーの３分野を調査

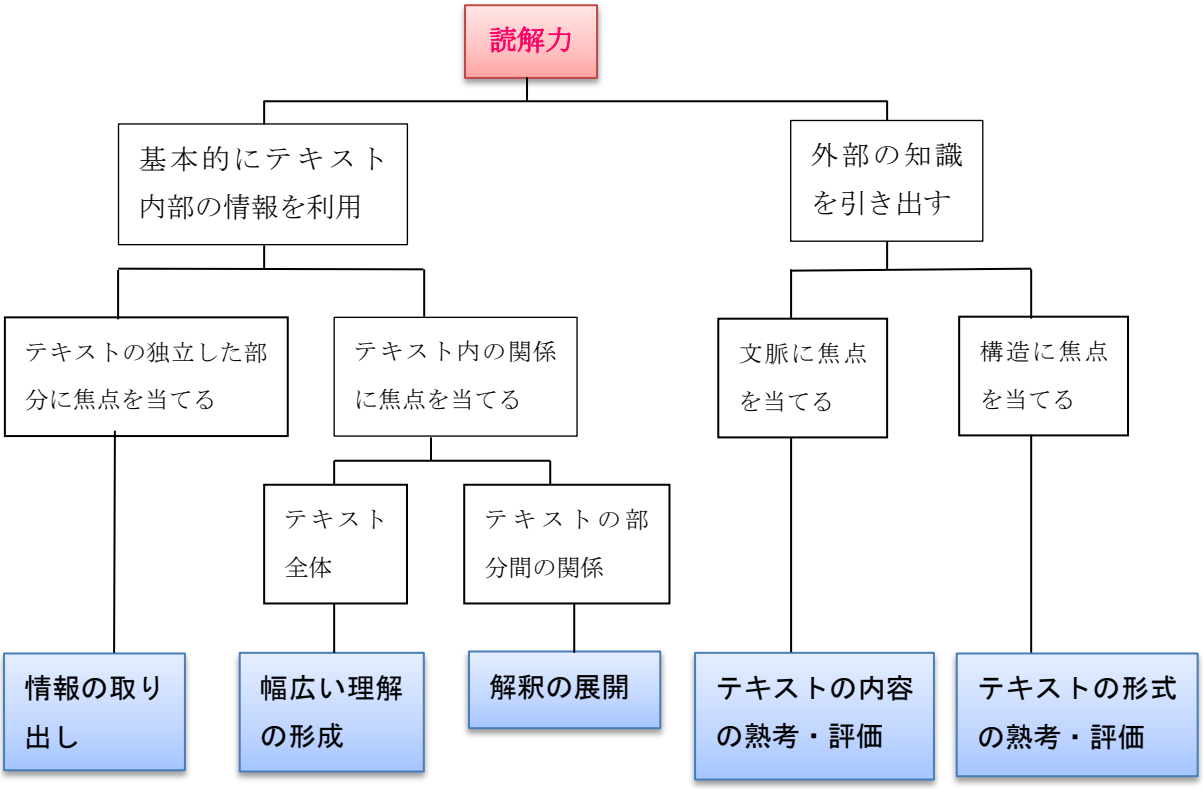
○　義務教育修了段階の１５歳児がもっている、知識や技能を**実生活の様々な場面でどれだけ活用できるか**見るものであり、特定の学校カリキュラムをどれだけ習得しているかを見るものではない。

○　**思考プロセスの習得**、**概念の理解**、及び各分野の様々な状況の中で、それらを生かす力を重視

ＰＩＳＡ型読解力の定義

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力

ＰＩＳＡ型読解力の５つのプロセス



テキストを十分に理解するためには、これらのプロセスを必要とします。そして、５つのプロセスの間には相互関係があります。

ＰＩＳＡ型読解力の問題の特徴　国立教育政策研究所統括研究官 有元秀文氏作成

- ○ 記述式問題が、約４割を占める。
- ○ 表やグラフ・地図など非連続テキストが、約４割を占める。
- ○ 生徒の興味関心を重視している。
- ○ 実生活と関連の深い課題が多い。
- ○ 理科・社会などと関連した幅広い領域から出題される。
- ○ 読んだことについて、自分独自の意見を表現することを求める。
- ○ 意見の根拠が、必ず本文の中になければならない。
- ○ 本文について評価したり、批判したりすることが求められる。

実際の問題を比較すると、ＰＩＳＡ型読解力の問題とＢ問題の特徴が類似していることが分かります。

どのような指導を行えば、ＰＩＳＡ型読解力が身に付くのかな？

ＰＩＳＡ型読解力を高めるためには

○　理由を挙げて、意見を述べさせる。
　　テキストに書いてあることを根拠とする。

○　課題について、自分で考えさせる。（課題解決学習）
　　考えたことは、ノート等にまず書き、その上で発言を促す。

○　段階を踏んだ指導を行う。（５つのプロセスの系統を基に）
　　情報の取り出し → 幅広い理解 → 解釈 → 熟考・評価

授業の改善へ

○　「なぜ」「どうして」という発問を取り入れ、テキストを根拠に考えさせる。

○　自分の考えを話す前に、書く活動を取り入れる。

○　教師の考える正解を児童に押しつけない。
　　（講義形式ではなく、児童主体の話合い活動を取り入れる。）

○　精読ではなく、全体を見通した読みを行う。

ＰＩＳＡでは、表現と読解を一体として捉え、思考の過程を見るために表現させています。また、「知識の活用」は、問題を解決することを目的として行います。

ＰＩＳＡ独自の考え方もありますが、活用に対する考え方の方向性は同じなので、授業改善の参考にしてください。